

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.89

2006年9月27日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp ※アドレスが変わりました



表紙絵 月を観る人々 (画・甲斐大策)

戦争以上の忍耐と努力	中村 哲
「現場主義」を旨に、臨機応変なサポートを	芹沢誠治
“チャンダ” づくめのモスクができる	松永貴明
17年ならした手料理の腕で事業に参加	荒野一夫
好奇心と疑問が仕事を進めてゆく	近藤真一
たくまざる「農業指導」の成果	進藤陽一郎
アフガン版「竹取物語」その3	鬼木 稔
ワーカーOB報告①現地で学んだ支援の原点——医師を目指します	大越 猛
自分の先入観を克服していかに虚心になりうるか	中村 哲

ペシャワール会は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。
彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

戦争以上の忍耐と努力

天・地・人の壮大な構図の中で実感

PMS (ベシャワール会医療サービス) 総院長

中村 哲

混乱の背景に旱魃

みなさん、お元気でしょうか。

今年も暑い夏が過ぎ、やっと山場を越したところです。

アフガニスタン南部では、タリバーン勢力の大攻勢が始まり、既に面の実効支配が一部に実現したと報ぜられています。これまで首都カーブルを出なかつたISAF (国際治安支援部隊) が米軍の要請で展開、激戦が続いているそうです。九月初め「二〇〇名のタリバーン兵を殺害、英国部隊をはじめ、NATO軍に二〇名の戦死」とのニュースが流されました。

その直後に、他ならぬアフガン政府が、「犠牲者の多くが一般市民だ」と報道、情勢は混沌としています。カーブルやジャララバ

ードの大都市でも外国軍に対する襲撃が頻発するようになっていきます。「見えない敵」に対して、外国軍は兵力の増強を図り、英軍四〇〇〇名を筆頭に、オーストラリアやNATO加盟諸国から増派が続けられています。

現政府の中にも変化があり、法務省が旧タリバーン政権のイスラム法を事実上復活、名指しを避けながら「外国による干渉」にいらだちの声も聞かれます。世界の非合法麻薬の九三%がアフガニスタンで生産されていると国連も憂慮、WFP (世界食糧計画) は国民の半数が餓えに直面すると訴えています。

アフガニスタンは過去最悪の事態に直面していますが、これは私たちが以前から訴えてきたことの帰結であると言えるでしょう。混乱の背景に史上最悪の大旱魃^{かんばつ}があり、人々が追い詰められている事実があります。これが



土石流によって埋った取水口

意外に報されていないのです。

このため、PMS (ベシャワール会医療サービス) としては、東部の旱魃対策に全力を注ぎ、少しでも飢餓を緩和し、自給自足できる平和な農村の回復を目指してきました。

土石流に襲われる

しかし、灌漑用水路計画も災難続きでした。今年四月、一〇キロメートル地点に達した用



土石流に襲われた用水路。柳によって守られた蛇籠の護岸は無事だった

水路は計一五〇〇ヘクタールを潤し、さらに進展していますが、七月二四日、取水口を猛烈な土石流が襲い、埋めつぶされてしまいました。これは米軍下請けの道路会社が自然の涸れ川の流路を無視して、その上に施設を建設したためです。取水口はジャリバ渓谷の下流に相当し、上流で雨が降ると、激しい流れが水路を襲います。このため、私たちは「涸れ川橋」で自然の流れを導いていました。

現在、水路の上流地方、クナール州やヌーリスタン地方で農民の反抗が広がり、米軍の活動が活発になっています。このため、補給線の確保に猛スピードで道路舗装が進められています。当方の警告にもかかわらず、おそらく、ゆとりがなかったものと思われます。「復旧に一年かかる」との噂が流され、せっかく回復した農地を耕す人々は落胆しました。「日本人が作り、米国が壊した」とささやかれ、道路会社を警備していたアフガン人兵隊さえ反感を隠しませんでした。

蛇籠の護岸びくともせず

季節はコメやトウモロコシの熟成期に入っています。いま水が涸れると、秋の収穫は大打撃を受けます。七月二九日現場に戻った小生は、「まず、水を通せ！ 本格的な改修は稲刈り後だ」と指令する一方、米軍当局者と交渉、地形を説明して自然の流路を確保するように求めました。

「You are too optimistic! (君らは甘い!)」この微妙な時期に、水路の水が途絶えたと、食い詰めた住民がどう思うか。今まで何度も誘拐襲撃を受けた君たちなら分かるだろう。住民たちの反応次第で、我々は引き上げを検討す

る。君らが住民と対応することになる。雨季は九月まで続く。土石流は明日再びくるかも知れぬ。急いでいたきたい」

実際、これほどの強硬な態度に出ないと、米軍民生局と下請けは動かないのです。普段威圧的な当局者は、少し神妙に見えました。偶然か、この交渉直後に再び雨が降り、慌てた会社はこちらの指示に従って自然流路の修復工事を始めました。

しかし、この土石流災害は図らずも水路の強靱さを実証したのでした。一見派手に壊されたのは、取水口周りの門番小屋や手すりなどの付け足した部分で、柳の根に守られた蛇籠の護岸はびくともしませんでした。将来の予定取水量毎秒八トンを得るには、幅六メートルの流路の水深を一・三メートル以上にしなければなりません。現在の固定水深が約〇・五メートル、果たして水路壁が耐え得るか、多少の不安がありました。

ところが、急激な土石流は大量の水を水路にあふれさせ、取水口から一・五キロメートルまで何と水深三メートルの洪水が流下しました。当然、水は水路の土手を越え、かつて脆弱だった部分からクナール河の方へ流れ出しました。でも過去二年間の改修を重ねた決



全壊に近い被害を受けた取水口のチョコキダール（守衛）小屋

壊部は補強の結果、全く無傷だったのです。浚^{しんせつ}深の手間に時間がかかると見て、水門を全開させ、水圧で強引に土砂を流させ、待ち構えた重機をフル稼働して流れてくる大きな砂利をすくい上げました。こうして、七月三〇日には灌漑が再開、秋の収穫を諦めていた農民たちは狂喜しました。

再び土石流——多くの民家が流失

でも甘かったのは米軍当局だけではありませんでした。今年は異例の少雨で、私たちが

油断していました。水路工事の先端、ブディライ村は大渓谷・ドラエヌールの下流に当たります。この渓谷の規模は、取水口近くのジャリババ渓谷の数百倍は優にあります。三月以来、一滴も雨が降らず、油断した私たちは自然の暴れ川の猛威を忘れていました。取水口の復旧直後、急いで計画変更を行おうとした矢先、ドラエヌール渓谷上流に降雨があり、八月四日、大量の土砂を含んだ水が工事先端五〇〇メートルを埋めつぶしました。

更に八月一五日、豊一枚もあるような巨石を転がしながら、再び濁流が押し寄せ、水圧が道路をもめくりあげて破壊、中流域では二〇〇年前にできたモスクが流失、多くの民家が濁流に飲み込まれました。新設の分水路は危機一髪でした。設計と方針を大幅に修正し、胆の冷える思いがしましたが、これはよい経験になりました。自然は恵みももたらしますが、人間が自然の掟を忘れると、無言で激しい警告を送ってきます。

それでも、渇水に悩むシェイワ、シギの両既存用水路へ送る分水路を八月末までに完成、一〇キロメートル地点の新設水門が開かれ、シギ用水路への送水が始まりました。渇水地獄と戦火の拡大、この殺伐たる世界の中で、

せめてものオアシスです。とはいえ、安全と平和は歩いて来ない、戦争以上の忍耐と努力、自然との共存の知恵が要ることを、天・地・人の壮大な構図の中で実感させられた熱い夏でありました。

作業は今もなお続けられています。日本にあつて私たちの事業を支えて下さる方々に感謝し、いつその御理解を賜りたいと存じます。

中村哲（なかむらてつ）九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、二〇〇三年春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約九万人（二〇〇五年度）。

*ワーカー通信

「現場主義」を旨に、
臨機応変なサポートを

ジャララバード事務所、渉外担当

芹沢誠治

日本人ワーカーは一枚岩で

昨年の九月にオフィスの責任者となつてから、会計の松永君、後に横山君と代わつた杉山君と三人で、アレヨアレヨと言いながら、一年が経ちました。なんだかやたら仕事が多く、滅茶苦茶忙しかった気もしますが、過ぎ去つてみれば、与えられた仕事に、大きな失敗もなく、狙った通りの仕事が出来たかなと、今、静かに振り返っているのですが……。

オフィスの仕事を、①毎日のルーティン・ワーク②渉外を中心とした、突然の仕事③オフィス移転に当たり、新しい体制を作ること、と大きく三つに分けて考えました。そして、いずれの仕事をするにしても、「現場第一主義」、オフィスは生き物である現場に対して、臨機応変のサポートに徹するという姿勢を最初に打ち出しました。そしてオフィスを携わる三人の考え方が多少違うのは仕方

ないが、問題が生じたときは、常に日本人ワーカーは一枚岩となつて事に当たることを確認して、仕事に取りかかりました。

毎日の突発事件を処理

ルーティン・ワークと一口に言っても、これが大変。①カナル（用水路）、ウェルズ（井戸）の各現場の機材・資材の購入とアレンジ②重機・車輛・燃料・ドライバーの手配③スタッフ約一〇〇名、レイバーを加え四〇〇名近くになる人達の出欠席・遅刻早退・残業手当の管理と給料計算。

車輛のアレンジは杉山君が基本となるシステムを作ってくれ、会計は給料の配布から苦情の処理まで、心優しい松永君が、コワモテで身体を張つて引き受けてくれました。

渉外中心の突然の仕事、これは起きてみないと分かりません。ドライバーの無断欠席、スタッフの解雇・新規採用のような小さな事から、地主・大家との契約、NGOや政府との交渉、さらには交通事故・盗難事件・強盗事件・セクハラ事件、ときには長老会議が必要になる住民間の争いまで、毎日必ず封建社会での出来事のような突発事件が起きました。もうあまり毎日のことなので、ちいとも驚かなくなりました。いかに、早く、正確に、きちんと、あと腐れがないように処理するか、が私の役割です。やっかいといえば、やっかいな仕事ですが、PMSの基本方針と原則を踏まえ、腹

を決めて事に当たれば、いちいち、中村先生を煩わせなくても、治まる所へ、きちんと治まる事が分かりました。

改革は急いではならない

一番大切な仕事は、山積みされていた問題を処理して、オフィスの新しい体制をつくることです。が、新事務所を建設して引越しがすんだものの、まだ終わってはいません。



灌漑が始まった地域で、田畑の耕作に勤しむ地元の農民

私はせっかちな性格で、今日の仕事を明日に延ばすのは嫌いなのです。年を取ると、ますます仕事を明日に延ばした翌日考えるハメになるのは、苦手・面倒になるのです。

「ものの改革は急いではならない」。これがアフガニスタンに来て学んだことの一つです。

オフィスの体制の改革となれば、どうしても上からの改革になります。上からの改革となれば、もし下の事情が分かっていないとすれば、良かれと思ってやったにしろ、押しつけ・改悪にしかありません。現在の状態が問題であるにしても、こうなるには、それなりの時間・事情・成り行きがあった訳で、それには、この土地の生活・習慣・風俗・宗教・物の考え方が、嫌が応でも含まれていない訳がない。例えばそれを、この土地へ来て一年にもならぬ者が、合理性一本で変革することなんかできるわけがない。誰が見ても不正と見える現象にしても、正義だからという理由で簡単に手をつける訳にはいかないのです。

この一年間に「オフィスの規則」「ドライバールール」「新規井戸掘削の手順と方法」などを作り、パシュトゥー語と英語で配布しました。しかし規則を作ったからといって、ルール厳守に拘ってはいず、時に応じどう運用するか、こそが大切だと考えています。これからも「物品購入のシステム」「物品管理の方法」を構築しないといけないのですが、ゆっくり腰を落ち着けて、現地の人達が心から納得する形を作っていきたいと思っています。

「チャンダ」づくめの モスクができる

灌漑水路建設担当 松永貴明

「チャンダ」

ちょうど半年ほど前。新事務所の落成式のときに中村先生からこういう発表があった。

「この新事務所敷地内にモスク（イスラム礼拝所）を建てる！」と。

そういうことで始まったモスク建設だが、まず始めたことといえば募金。通常、現地ではモスクを建てる際、まず資金となるお金を集める。これは当たり前である。お金がないとモノは建たない。ではどこから集めてくるのか。一般の人たちから集めるのである。つまり、

「モスクを建てるから、ちょっと寄付してくれませんか。ホダーホシャリーギ（神様がお喜びになりますよ）」

などと言いながら、モスク建設の主催者は路上に立って募金活動。道ゆく人たちはみな信仰心の篤いムスルマーン（イスラム教徒）で、モスクを建てるんならワシも手伝わなあらんなあ、とばかりになけなしのお金を寄付する。

こういう光景をアフガニスタンではよく見かけ

る。すでに中村先生からの寄付もあったのだが、形だけでもいいからと思つて、スタッフからお金を募ることにした。ちなみにこういった寄付のことをこの言葉で「チャンダ」というらしい。

事務長の芹沢さんがどこからともなく作つて持ってきた募金箱（チャンダ箱と勝手に命名）を事務のアフガン人責任者エンジニア・ハビブラに手渡し、朝礼の時にスタッフに説明してもらった。「というわけで、お金を集めることになった。ついてはこの箱にお金を入れるように」

となぜか命令口調で言つた直後、おもむろに胸ポケットから千ルピー札を抜き取り、頭上に掲げて、急降下でチャンダ箱に放り込んだ。そんな大金を入れるとは思わず、私は驚いた。よくよく考えたら、エンジニア・ハビブラは見栄っ張りであつた。いやいや、大なり小なりアフガン人は一般的に見栄っ張りである。ましてや社会的地位の高い彼である。見栄の張りが尋常ではない。千ルピーは換算すると二千円ほどだが、アフガン人にとっては大金である。PMSの守衛の初任給が七千円強であることから、アフガン人にとっての二千円の価値を想像していただけたと思う。

もちろん、彼が見栄だけで千ルピーもの大金を出したわけではないと思う。九割以上は彼の篤い信仰心によるものだと思つてやまない。

セメントも「チャンダ」

集められたお金は会計担当である私が管理することになった。ある日、事務職員のアブドル・アハッドことアハッド・ジャンがやってきてこう

言った。

「モスク用にセメントを買うから、お金出してくれ」

「おう、いいよ。何袋買うの?」

「まずは一五袋で様子見。一度にたくさん買って、あまったら寄付金もつたないやろ」

と言うので、ひとまずセメント一五袋分のお金を渡した。数時間後、アハッド・ジャンがセメントを買ってきたというので、数を確認しに行ってみると、セメントが一五袋と二袋。えっ、二袋! なんと数えてもトータル一七袋。

「アハッド・ジャン、どう見ても二袋多くねえか?」

とアハッド・ジャンに訊くと、ふっふっふと不敵な笑み。

「チャンダ(寄付)だよ。チャンダ」

「……えっ? チャンダあ? 誰からの?」

「セメント屋から。モスクに使うって言ったら、余分に二袋くれた」

とこんなことがこのあと数回も続いてトータル二〇袋以上のセメントをチャンダでセメント屋さんから頂いた。

ほかにもモスク用のレンガを運んできた運送屋さんやなぜか五〇〇ルピーを置いていたり、毎月のスタッフの給料日にチャンダ箱が小銭でいっぱいになったり、壁のモルタル塗りの費用を全部負担すると申し出てきた元PMS職員が出てきたり、いつのまにかモスクの敷地内に木が植えてあったり(スタッフの誰かが家から持ってきて勝手に植えたらしい)。

そんなチャンダ尽くめのモスクはもうそろそろで完成予定。今は仕方なく食堂でお祈りをしていくアフガン人スタッフは今か今かと完成を待っています。

●訂正とお詫び

前号の会報7頁中の表に一部誤りがございました。正しくは左に掲載しております通りです。謹んでお詫び申し上げます。

表4 水源確保事業の現状

() 内は完成した井戸・修復したカレーズの数
(2006年4月15日現在。第Ⅰ期井戸事業は同日を以て完了し、4月16日より第Ⅱ期井戸事業を開始)

	飲料井戸	灌漑井戸	カレーズ	計
ダラエ・ヌール	395 (263)	11 (11)	38 (38)	444 (312)
ソルフロッド郡	542 (542)			542 (542)
ロダト郡	263 (263)			263 (263)
カイバル峠	4 (4)			4 (4)
アチン郡	171 (171)			171 (171)
スタッフ用	20 (20)			20 (20)
その他	17 (17)			17 (17)
合計	1412 (1280)	11 (11)	38 (38)	1461 (1329)

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。指書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

アリアナ大地(心)

4

移民と難民

甲斐大策

パキスタンの一実業家が胸を張った。
「私達はムハジール、大統領も……。独立時の印度側からのimmigrantsだ。」

移民だという。一方、アフガニスタンからの流出民は、自分達をマジリンと呼んだ私はそれを難民と翻訳してしまった。アジア内陸の歴史は、大挙して移動した人々の記録で埋まっている。その痕跡は、侵略、進出、移住等々として年表の項目をつくる。現代、同様の事実があると移民と難民に振り分ける。

大半の移動は、天災や侵略者や圧政がもたらす苛酷な環境からの脱出と理解してきた。正しく、そして軽薄な納得である。

六十二年、預言者ムハマドは、審判の日に備えるよう説く啓示へのマッカの人々の無理解と迫害からマディナへ遁れる。その移動をヒジュラ(避難・移住)といい、この年をヒジュラ紀元、イスラム紀元とした。この時預言者に従った七十余人の人々をムハージュリン(移住者達)と呼ぶ。単数形のムハジールであれ短く訛った複数形のマジリンであれ、源は同じだった。移民・難民に分けた私は、言語知識の浮浅な愚かさの遙か深みに、人々の心の奥に生きる未知の移動の認識の存在を思い知らされた。

印バ、アフガニスタン、イランとその周辺に、アリアナ人をはじめとして渡ってきた人々の四千年、今も人々は流入し流出しつづける。移動はつづく。移民と訳されようと難民と呼ばれようと、私達の認識が届き得ない移動の心を、彼等は保持している。単に生き延びる目的以外の何か、である。

ハワイ、南米諸国、旧満洲への日本人官約移民、また契約移民達の記録はあるが、その後の棄民の事実が移民当事者の記憶に残るだけである。盆暮れと連休に右往左往する以外、人間の移動にともなう希望と哀しみ、期待と不安、生きる痛みを識らない私達に、難民と呼ぶ人々と共有出来る精神が育つのはいつのことだろう。

一七年ならした 手料理の腕で事業に参加

ジャララバード事務所炊事担当 荒野一夫

一七年間の主夫業

昨年一二月、会報が送られてきた中に男性炊事担当募集の文書が目につきました。五年前、中村先生の講演を聴いた時、私もこの活動に参加できたら、と思いました。それに役立つ技術もなく、肉体労働をする体力の自信もなく、英語も出来ず私には無理だと思っていました。炊事担当なら私にも務まるのでは、と応募しました。私は料理が得意ではありませんが、一七年前、連れ合いが昇天し、娘・息子と三人暮らしで主夫をしてきました。

六年前娘の仙台遊学を機に、家族の共同生活を解散し学生の息子は京都に残り、私は老後を晴耕雨読で暮らそうと準備していた琵琶湖を一望する林間の「終のすみか」で一人暮らしをはじめました。休日に友人達を招いて楽しい時間が持ちたく、庭に石窯を築いてピザを焼いたり、燻製を作ったり、旨いビールを手造りしてもてなしていました。食材が少ない中で毎日多人数の食事を作る自信はなかったのですが心を込めて努めれば、と少し

横着な考えでの応募でした。それはベシヤワール会の活動に参加できるという思いと、異国で暮らすという夢が実現できるのでは、という思いからです。

コンニャクもつくります

二〇〇七年六月以降の赴任と応募文に記していたのですが、思い違いと思い入れから定年まで二年を残し今春退職し六月に成田を発ちました。料理に自信のない私は、PMSの現地調達の考えから外れませんが食材を持参しました。主なものに業務用和風だし・乾燥ゴボウ・コンニャクの素・ワカメ・ひじき・切り干し・高野豆腐・乾燥揚げ・干椎茸・板海苔・唐揚げ粉・粉末コンソメ・片栗粉・米酢・こま・粉わさび・鰹節と削り器などです。

業務用和風だしは友人が送ってくれたのですが、私の料理の腕を大いに補ってくれました。乾燥ゴボウは海外青年協力隊等でアフリカで長く暮らした友人が、持って行くと頂いたもので、味と香りに優れたものです。コンニャクの素は、面接で事務局に伺った折りにアドバイスされインターネッで買ったのですが、刺身コンニャクにしてわさび・酢みそでお出しすると大好評です。煮物にもしますが四〇グラムの素で五丁の美味しいコンニャクが作れます。

食材の買い出しに私が行くことができず自分の目で食材を選べないのかもしれませんが、スタッフハウスのチョコキダール(守衛)さんに依頼します。時々依頼したものが無かったと言われた時は、ひじき・切り干し・高野豆腐の出番です。

巻き寿司や手巻き寿司を皆さんに楽しんでもらったり、うどんを打ったりもしています。唐揚げ粉を沢山持ってきたのですが、鳥インフルエンザで鶏肉が使えないのが残念です。豚肉・魚が無いのは解っていましたが、肉類が牛ミンチしか使えないので主菜の献立が限られます。

多くの料理は料理本を参考にこちらへ来て初めて作ったのですが、計量スプーンも秤もなく、味噌や料理酒、少量使う調味料もなく、こんな感じかな、で作っていてそんなつたない料理を、皆さんから美味しいと言ってもらえると本当に嬉しい限りです。

好評の料理、焼きナス・きんぴらゴボウ・里芋のつや煮・だし巻き・オムレツ・てんぷら・酢の物・胡麻和え・叩ききゅうり・ハンバーグ・メンチカツ・コロツケ(いづれも手作りソース付)・ポテトサラダ・煮干しの佃煮・炊き込みご飯・ワカメご飯・コンンスープ。

炊事担当として派遣されましたが、午前中はオフィスの仕事を手伝い、鉄筋などの資材の買い付けにも同行し街のあちこちへ行きます。活気のある街の様子と、貧しそうだけど穏やかな人々の暮らしがかいま見えます。この平穩がいつまでも続くことを願うばかりです。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

好奇心と疑問が 仕事を進めてゆく

灌漑用水路建設担当 近藤真一

レイバー（作業員）たちの世間話

ハリネズミを見つけた。

以前、水路現場で一緒に働いている人から聞いた話を思い出した。

夜、針を持った動物がとうもろこしを食べに山から下りてくるんだ。そいつを捕獲して食べる人がたまにいる。私は食べないけれど。

なんとなく私は聞いてみた。その肉はおいしいの。

いや、あまりおいしくない。あれは肉があまりついていないし臭いんだ。

食べないといっておきながら、嫌な顔をしながら彼は教えてくれた。

暑くなると、かえるをよく見かけるようになる。

昼食後、質問された。日本人はかえるを食べるのか。

私は答えた。食べる人もいるし、食べない人もいる。君らは食べないのか。

すると、みんな食べない食べないと強く否定し始めた。そんな中、一人のおじさんが話を始めた。

ロシアと戦争をしているとき食料が無くて、食

べたことがある。でも、身が少なく、おいしくなかった。で三度だけしか食べなかった。

ある日、七人ほどレイバーが集まって、話をしていた。

蟻はなぜ列を作って歩いているんだ。

ある人は知らないという。またある人はそんなことを知っているやつがいるのかという。この話し合いは一〇分ほど続けられた。

仕事中、数人が大声を出しながら話し合っていた。

仕事中にいったい何を話しているのだと私は聞いた。

みんなで紅茶について話をしていたんだ。我々がいつも飲む緑茶は低い木の葉っぱだが、紅茶は桑のように背の高い木の葉なのか、緑茶のように低い木の葉なのかそれとも別のものなのか、何なんだ。何からできるのだ。

毎日まいにち、このような会話を聞きながら私は水路現場で働いている。

好奇心を大切に

現地の人たちの話を聞いていると、とても好奇心旺盛でなんにでも素直に疑問を抱き周りにいる人達に質問をしていることが分かる。

わたしは水路現場で小さなコンクリート構造物を作っているが、たとえば鉄筋加工。なんでここをこんなふうに曲げるんだ。なんでここはこんなに太い鉄筋を使うんだ。この形の鉄筋は何に使うんだなど、いろいろなことを質問される。水路作業が始まって三年が経つのだろうか。初めは

日本人と一緒に現場を任されていた現地のエンジニアが、今では一人でひとつの現場をまかされ、次から次へと仕事をこなしていけるようになった。それは彼らが分からないことを日本人なりほかのエンジニア達に素直に質問し、一つ一つ疑問を解き、学んでいったからだと思う。我々は水路仕事に関することだけでもまだまだ学ばなければならぬことが数多くある。しかし、近い将来きつと身につけることができると思う。現地エンジニアレイバーは今も新たな疑問を抱き、解きつつ仕事を学び、着々と水路を完成させている。最後まで現場に残るのは彼らエンジニアでありレイバーなのだ。

その中で日本人の大切な役割のひとつとして、日本人が知っていて、現地人が知らないこと。現地人が知っていて、日本人が知らないこと。日本人にできて現地人にできないこと。現地人にできて日本人にできないことがあることを認識し忘れない。当たり前のことであるが、現地で働いていると忘れがちになってしまう。人の短所を責めても何も生まれない。お互いの長所を活かすべきである。現地人も日本人も共にあるべきだ。

話し変わってハリネズミ。ハリネズミの針はいつた何なのか。骨なのか毛なのか何なのか。調べる為に土に埋め、二ヶ月ほど後に掘り返してみた。結果分かったことはあの針は骨ではないということ、人間で言う皮膚が硬化してできる爪のようなものだということが分かった。私の指に刺さるほど固かった針が、ストローのように軟らかくもろくなってしまっていた。

たくまざる

「農業指導」の成果

農業計画担当

進藤陽一郎

「この畑はまだ土質が硬い。もつと堆肥を多く入れた方が柔らかい土になって芋も良く太ると思う」

「今年は気温も高いし土の乾きも早い。茶への水遣りは去年よりもこまめにやろう」

「明日は上流のワイガル村の茶圃場を見に行こう、ちゃんと水遣りが行われているかチェックしないと」

以上は実は私ではなく、試験農場の担当農家のモハマド・アジャンの意見なのです。農業計画が育てるものは「作物と人」。こうした積極的な意見を農家が出してくれるようになったという事は私達の望み通りと言えます。ですが実の所は予想していなかった収穫であり、むしろ不思議な事でした。

「主役は農家」が私達のモットーです。それは農家本位に自由に仕事をするという意味ではなく、農家自身が中心となって栽培の基礎

を習得し、観察や考察を積み重ねていく所に要点があります。すると一番問題となる事は、そうした自主的な農家の参加をいかにして促すかという方法論です。私は考えました。そうこう考えているうちに時間だけが過ぎ、何と私が何もしていないのに、気が付けば冒頭にお伝えしたような積極的な提案が見られるようになっていたのです。

勿論結果としては望ましい状況であるものの、何故こうなっているのかを訝しく思っていた私はふと、毎日の作業を振り返り気が付きました。実はモハマド・アジャンの積極的な働きは紛れもなく私との関わりの中で培われたものだ、ということ。ただし、それは「私の指導」によってではなく「彼から私への指導」という全く逆の作用によってですが、つまり私は農家の指導をするどころか、農家の事がよく分からない素人なので、作物の状態を観察するにつけても、作業の段取りを立てるにしてもモハマド氏の意見を元にし、彼を頼りにしています。すると私が考えない分だけ必然的に彼が考え、また彼が全ての作業の中心に自ら立たざるを得ない状況が自ずと生まれて、図らずもモハマド氏に「俺がしっかりしなきゃ駄目だ」という意識を育てる事に成功していたのです。

また、私が頼りとして存在がもう一人



モハマドとともに試験農場を担当する進藤ワーカー

います。農業指導員の高橋修さんです。なるほど私は農家を頼りとし、逆に農家の自発的な参加を引き出したのかも知れませんが、単に私が農家の意見を頼るだけならば、それは現地農家の自分本位のやり方を助長しかねません。そのように現地農家が栽培技術の基礎的な部分をおろそかにしがちになるという欠点を補って下さるのが高橋さんから届く的確



試行錯誤が続く茶葉の栽培

なご指導です。モハマド氏もまた「ミスター・タカハシの意見ならば」と必ず耳を傾けますので、私は高橋さんと農家との情報のやり取りの間に立つ事は何にも増して重要な役割と自認しています。

以上のように、モハマド氏は私の素人の（無）指導と高橋さんのプロの指導との間で「主役は農家」に違わない中心的な役割を担

いながら日々成長を続けています。その中で私の役割は頼りないものですが、むしろ結果良ければ全てよし、と勝手に胸を張っております。

さて、モハマド氏に見られるような担当農家の成長も含め、この四年の活動の蓄積により農業計画の基盤がより強化されてきました。作物の栽培に関しては、例えば昨年度まではサツマイモ、馬鈴薯、アルファルファといった種子を日本からその都度送ってもらっては栽培を更新しており、いわば多くの部分で日本とへその緒がつながったままの状態でしたが、現在段階的に栽培・採種・貯蔵の自給的なサイクルが実現し、このドラエヌールの試験農場を基地として独自に種子の生産、技術の普及を行うことができるようになってきています。先に述べましたように農業計画が育てるものは「作物と人」。即ち普及すべき作物と、その栽培技術を受け継ぐべき人材との両方がこの土地に根付いて初めて無理のない普及活動が可能になるもの。その両方が一年一年、地道かつ確実な歩みを続けています。

私は一人では、指導力も農業の知識・経験もない者です。しかしモハマド氏や高橋さんとの間で私は私の役割を得、活かされています。「自分は何をしたいのか、自分に何ができるのか」と自分自身を問い詰めても見えな

いものが、人と人との関係の中に見つかる事があり、それはただの感覚的な安心以上の何かを与えてくれます。同様に、ペシャワール会の皆様によって支えられている「食べもの」や「いのち」の地平に立った事業の中、現地の人達と共に働く事は私を豊かに満たしてくれるものがあり、それを感じる時、私はしあわせです。

それでは、どうか皆様心身お元気でありませう。また日本においてもアフガンにおいても等しく大切であるものが変わりなく皆様と共にあります。収穫の秋を間近に控えたドラエヌールより願っております。

▼未使用の切手、ハガキを！

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円がかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

アフガン版「竹取物語」

その3

灌漑用水路担当 鬼木 稔

屋根の構造は、梁の上に竹を敷き詰め、その上にさらに茅を葺いて屋上を土で覆って完成となるのだが、次に必要な材料は茅である。幸いなことに、取水口対岸の中州にたくさん自生している。

今度は渡河に慣れた人で構成し、日程を決める。しかし当日の朝になって、すでに刈り取った茅があるから、それを搬入しても良いかと聞いてくる。どうも真相は別のところにありそうだが了承する。だが私は日本から持ってきたゴムボートを、この時が出番とばかり準備してきているので、おいそれと止めたくはない。結局対岸に渡ってあった太いワイヤーケーブルが、今回の異常増水で切断されたので、その現状視察もあって、一人で渡ることにした。反対する人もいたが、私にはカヤック乗りの経験もあるのだ。

ボートに空気を入れていると、またまたサディックが自分も一緒についていく、と言う。現地の人達の渡河方法は、大型自動車のタイヤチューブに空気を入れ、二つ折りに紐で縛って、その上に腹這いとなって手足で漕ぐ。何せここから一番近

い橋でも二〇キロ程下流に一本しか架かっていない。対岸との行き来はもっぱらこの方法である。相当に急流だが、私のボートはオール付きだ。

手足で漕ぐチューブよりは推進力は勝れているだろうと勝手に想像し、流される距離を想定して、大方の着岸点を目測する。私が先に漕ぎ出す。力一杯漕ぎ続けるが、陸から見たよりはずっと川幅は広く感じる。ボートへの水抵抗は予想外に強く、流される。いつしか目標地点を通り過ぎる。サディックが対岸に着いたらしく、大声で私を呼んでいる。漕ぐ手は休めず「大丈夫だ」と返事をする。一五〇メートル程下流に流されて接岸、陸づたいで走ってきたサディックに紡いロープを投げる。意に反し、タイヤチューブのほうが性能が勝っていることが実証された。ワイヤーは大きなコンクリートの基礎ごと引っぱられ、傾斜したコンクリートの縁で、反復し打ち付けられる間に擦り切れて、二〇ミリの太いワイヤーが切断されたものであろう、修復不可能だと解る。

帰路は上流に、もう少し流れが緩やかな場所があるとのこと、中州からさらにもう一つの流れを渡らなければ、そこには行けないが、従うことにした。中州の行く手にサディックが何やら指差して、注意を促している。よく見ると、何と！赤錆びた長さ四〇センチ程の不発弾が打ち上げられている。今も戦場にあることを認識させられた。川幅は先程と変わらない。今度は船首を少し上流に向けて漕ぎ、対岸に一〇〇メートル程流された地点に到着。茅を踏み分けながら、上流までボートを担いで歩く。サディックがオールやポンプも

持ってくれる。

それにしても、いつも私の身の安全を考え、付き添ってくれる姿勢には感心し、頼もしい限りである。渡河地点で腕の疲れを癒すため、小休止をした後、取水口に直接乗りつける旨提案する。途中に堰が一つあって、そこが白く波立っているのが面白そう。今度は川下りである。本流に巻き込まれないように注意が必要だが、無事取水口へと続く緩流に乗り移って、あとは流れにボートを任せる。かくて他にも面白いことがあったが、仕事は楽しみながらできるに越したことはない。

朝晩の冷え込みも、めっきり強くなってきた。一〇月下旬、ベシャワール会会員皆様の善意と、私の楽しい思い出が部屋いっぱい詰まったチョキダール小屋は完成した。(了)



取水口の竣工碑の前に立つ鬼木ワーカー

●ワーカーOB近況報告①

現地で学んだ「支援」の原点

— 医師を目指します —

元・灌漑水路担当ワーカー 大越 猛

会員の皆様、お元気でしょうか。私は二〇

〇三年四月から〇四年四月にかけてジャラバード事務所で水源確保事業の事務方に従事していました。現地での活動経験は私の人生の進路を大きく変えることとなりました。私は元来文系ですが、現地で中村先生と仕事をするうち、先生の原点である医師を目指したいと思うようになりました。帰国後二年半の受験勉強を経て、この度念願かなって医学部に進学することとなりました。

振り返れば、私が現地に赴いた動機は決して純粹なものではありませんでした。当時、私は国連職員になって難民支援をしたいと考えておりました。ワーカーに志願したのも、そこでの活動をステップに将来は国連職員としてより大きな仕事をしてやろうという浅い考えに根ざしていました。今思えば、本当に現地の人に役立ちたいという思いよりも、国連職員の権威や肩書きに対する憧れの方が強

かったのでしょうか。

そのような幻想は現地に赴いてもろくも崩れ去りました。というのも、中村先生率いるPMSの方が、その道の専門家を多数抱える国連やその傘下のNGOよりも少ない予算で遥かに良い仕事をしていたからです。なぜでしょうか。その理由はPMSでは中村先生が、常に現地の人の「いのち」を救うことだけに執念を燃やし、すべてをそこから発想し、行動に移すからでした。水が無くなれば命を救うことができないと知れば、すぐに自らつるはしを振るって井戸を掘り、すさまじい集中力で土木技術を学び、水路を引く。

一見すると医師らしからぬ行動ですが、私には先生がそこまで「いのち」に駆り立てられるのは、先生が他の何者でもなく医師として多くの「いのち」に責任を負い、救おうと奮闘してきた過去があるからに他ならないと考えられました。それに対して、自分にはそのような経験

はなく、現地で事務職を続けるうち、仕事の重要性が頭では理解できても心で理解できず、現地生活のつらさばかりが先に立つようになってしまいました。このまま続けても良い仕事はできない、自分も原点に立ち返ってまずは「いのち」に対するこだわりを持てるようになっていこうと思うようになりました。そのためには医療技術を身につけて実際に沢山の「いのち」に触れ、責任を負い、心を動かし、自分のなすべきことを見つけなくてはならないと考えるようになりました。このようにして医師を志すことを決意したのでした。

八月、受験勉強も終わり、中村先生が東京に講演会にいらした際に同行する機会を得ました。先生は冗談めかして「自分は医者よりも土木の現場に出る方が性に合っていますよ」とおっしゃっていましたが、お話を聞くほど先生の原点がやはり医師であること、そして先生のように既成の概念にとらわれず「いのち」を助けるためにはあらゆる手段で全力を尽くすこそが真の医師であることを痛感しました。

私は人生の新たなスタートラインに立ったばかりですが、中村先生から教わったことを胸に、真の医師を目指し、少しでも多くの苦しむ人を助けられるよう努力を惜しまぬ所存です。

自分の先入観を克服して、かに虚心になりうるか

『丸腰のボランティア すべて現場から学んだ』（まえがき）

PM S（ベシヤワール会医療サービス） 総院長

中村 哲

この度、現地に派遣された日本人ワーカーたちの報告を世に出すことになりました。

活動が二二年を超え、現地アフガニスタンやパキスタンの情勢、これを取りまく国際情勢と日本自身もずいぶん変わりました。「海外援助」の考え方や規模も今昔の感があります。つまり、海外に赴いて支援する側と、支援を受け取る側の双方の意識が変わってきたといえます。

活動を始めた頃には比べると、海外支援が大きなグローバルズムの一環として世界の辺境の地まで浸透し、途上国が近代化の嵐に根こそぎさらされるようになったのも、否定できない事実のように思えます。地域の文化や固有の生活様式も、大都市を中心に失われつつあります。決して支援する側に悪意や下心があるとは限りません。文明の便利さを提供することが絶対悪でもありません。

問題は、私たちが良しとするものが、必ずしも相手にとって良いとは限らないという事実です。かつて「互恵平等」ということが援助の基本姿勢とされていました。これが大は国家間援助、小

は個人の善意の支援に至るまで、ひとつの基調をなしていたのです。支援する側も概ね素朴な動機で動いていたような気がします。たとい利権がらみの不正や、ひんしゆくを買う援助があったとしても、相手の要望に応える形で支援が行われていました。

今、国際支援の全体的な色調を眺めるとき、途上国の立場よりも先進国が支援内容の是非善悪を決めてしまう傾向が強くなってきたような気がしてなりません。

このような流れを考えると、私たちの現地活動は、グローバル化という時流に抗して行われてきたことを思います。といっても、私たちに確乎とした援助哲学がある訳ではありません。強いて言えば、現地で遭遇する困った人々を見捨ててはおれなかったこと、現地の文化や価値観を尊重し、泣き笑いを共にしてきたことにあります。

現地に赴いたワーカーたちは、様々な動機でやってきました。青年らしく志を高くして何かを遂げること、情熱を傾ける者、日本で満たされず

「青い鳥」を求めて来る者、若い日の思い出作りで参加した者、日本の社会になじめない者、半ば興味本位としか思えない者、「国際援助」の美名に惹かれる者、本当に様々でした。

でも、私は動機を問わないことにしていました。誰がどんな良い働きをするか、やってみないことには分からないからです。また、いわゆる「使える、使えない」という能力そのものだけを評価することもありませんでした。その人が、いかに誠実に任務と関わり、自分の先入観を克服していか

に虚心になりうるか、日本人としてのまごころと心意気、素朴な人情を買ったのです。こうして何十名もの人々が現地で働きました。彼らの働きがなければ、現地事業は成り立ちませんでした。特にアフガニスタンの診療所が立ち上げられた一九九二年以降は、そうでした。私がベシヤワールを離れることが多くなり、私ひとりの力だけでは基地病院を維持することが難しくなってきたからです。

さらに二〇〇二年以降、大旱魃かんばつに苦しむアフガン東部で「農村復興（緑の大地計画）」に主力が注がれるようになると、井戸事業、試験農場、用水路建設に多くの青年たちがやってきました。その頃までには、私のほうも歳をとってきて、親子ほど離れた世代のワーカーたちが主力となっていました。今では、ジャララバードというアフガン東部の町で、常に十数名の「子供たち」に囲まれ、大家族制の中で暮らしているようで、なかなか楽しいものです。

実際に大地と自然に触れる農業や土木の作業は、

日本で体験する若者が少なくなっています。また、どうしても「便利」に慣れすぎた都市社会では、「頭で知ってはいるが、自分の体で覚える機会がない」ため、観念的な考えに流されやすくなります。数十年前まであった大家族制や地域社会的絆を知らぬ者は、「孤独な群衆」の一人として、自分だけの観念の世界に閉じこもりがちです。しかし彼らが口をそろえて述べるのは、「現地に来て初めて人の情と絆にふれた」、「汗を流して働く嬉しさを知った」ということです。

もちろん、どんな人でも個性や癖がありますから、常に和氣藹々^{あいあい}というわけではありません。アフガニスタンもパキスタンも、文化事情がずいぶん日本と違い、これまた現地でしか体験できぬ人間関係の確執にも巻き込まれます。初めは物珍しさも手伝って、「日本にはない良さ」を賞賛しますが、ある時期を経ると嫌気がさしてくることが多いようです。それも過ぎると、実は美点も欠点も表裏一体で、その人や土地をそのものとして受け容れることが出来るようになります。そうして日本では得がたい人間のあり方、自然とのつきあい方を知り、帰っていった者も少なくありません。これは、私たちペシャワール会の方針が、「現地と一体となり、苦楽を共にする」ことにあり、「議論や会議だけで事業は成り立たぬ」という徹底した現場主義を貫いてきたからではないかと思えます。実事業というのはすべて同じでしょうが、水理学を学び、設計図を描いただけでは、井戸や水路は掘れません。農学書を理解しても収穫はできません。当方としては、いきなり現場に

投げ入れて、日本の常識を破ることから始めます。また、大怪我にならぬ程度の失敗には目をつつります。最近の日本は、「若気の至り」を許さぬ気風で、若者たちが萎縮しているように感ぜられるからです。

こうして任務を終えて帰国しても、現地で学んだ「技術」は日本で役立ちません。英語ならともかく、パシュトゥー語やペルシャ語を覚えても、評価はされません。しかし、「人にとって何か大切なもの」を心のどこかにとどめる、そのことが何よりもかけがえのない収穫だと思えます。

このワーカーたちの記録は、彼ら自身の変化し

てゆく貴重な軌跡を示すものです。全く事情の異なる異文化に放り出され、悲喜劇と泣き笑いを繰り返し、自分とは異質なものに触れた驚きと戸惑いの記録でもあります。

私のこれまでの報告書だけでは理解できぬ、現地事業の最前線の一端を窺い、私たちの事業が多くの人々の関りと協力で成り立っていることを知るよすがとしていただければ幸いです。

〔丸腰のボランテア すべて現場から学んだ〕
ペシャワール会日本人ワーカー・著／中村哲・編 四六判並製四〇〇頁 1890円は石風社刊。同封のハガキで注文できます。

ペシャワール会2007年カレンダー

「大地の家族」

画・甲斐大策

同封ハガキで申込受付中

1500円(税・送料込)／A2判オールカラー

*例年ご好評いただいておりますカレンダーが完成間近です。本年も、毎号の表紙絵を飾る甲斐大策氏の作です。本年のテーマは「家族」。アフガニスタンの大地に生きるさまざまな民族の暮らしが、色鮮やかに描かれています。発送は11月初旬の予定です。ご予約下さい。



表紙画「ヌリスタン幻影」

丸腰のボランティア

中村哲・編
ベシャワール会日本人ワーカー・著



すべて現場から学んだ
診療所をつくり、井戸
を掘り、用水路を建設
する——現地日本人ワ
ーカー47名による活動
報告集 【新刊】1890円

空爆と「復興」 【2刷】 1890円

辺境で診る 【3刷】 1890円

辺境から見る

ダラエヌールへの道 【3刷】 2100円

医者 井戸を掘る 1890円 【10刷】

医は国境を越えて 2100円 【6刷】

ベシャワールにて 1890円 【8刷】

聖愚者 大策の物語



「表紙をめぐる小さな物語」
が、書下しを加え一冊に
1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092 (714) 4838

アフガニスタンの診療所から

609円 東京都台東区蔵前2-6-4
筑摩書房 TEL 03 (5687) 2670

価格はすべて税込価格(税5%)です

●事務局便り

*二〇〇一年の9・11事件から五年が経った。その報復として始まったアフガン空爆は、今もなお続けられている。カンダハールを中心とするアフガン南部では、「旧タリバーン」と称されるグループが「デモクラシー」を錦の御旗とする外国軍と戦闘を繰り返して、連日「殺害」されている。戦闘激化の背景には、長引く早魃と復興支援の無策・無定見による農民の疲弊がある。二〇〇三年三月に始まったアメリカによるイラク侵攻からも三年以上が経ち、開戦理由であった、フセイン政権の「大量破壊兵器の保有」と「アルカイダとの関係」も公式に否定された。それでも、先制攻撃に「正当性」を付与しようと、「イラク民主化」を強弁し、同盟国として日本政府もそれを支持している。一連の出来事を見ていくと、戦争とは、「集団妄想」以外の何者でもないのではと、という思いにとらわれる。「反テロ戦争」という妄想とそれに対するリアクションによって組織された妄想によって、いかに無益な血が流されたことか。

9・11テロと「反テロ戦争」突入以降の世界は、むき出しの暴力が顕在化し、「理想」の追求へのシニシズムと「現実主義」が横行している。

◎村から

テロと空爆が「深く思考」することを吹き飛ばし表面の印象判断が世界を覆う時流に抗して、忍耐強く考え具体的に実践することに、希望を託すしかない。

*訂正 前号の「らい」表記問題」という問題(88号十九頁)に誤りがありましたので、訂正いたします。誤り「らい予防法廃止五年」↓「らい予防法廃止十年、国賠訴訟勝訴五年」

私がこの会を知ったのは二〇〇一年九月一日の数日後、音楽仲間のホームページでした。それから自分のバンドのライブの時などに会のパンフレットを会場に置いたりしてきました。事務局でお礼状書き、切手整理などをするようになって三年。自分はいつも事務局に行く度に、人間の暖かさや繋がりの大切さ、かけがえのないさを感じます。現地の話を聞く時、事務局の方々との交流でそれを感じます。そして会員及び支援者の皆さんから送られて来るお便りでもそれを感じ、「自分と同じ思いの方々が色んな所にたくさんいるんだ」と思うと、胸が熱くなります。そして、この事務局で感じられる人間の暖かい繋がりが、いつの日か全ての大地を優しく包みこむ日が必ず来る!と思わせてくれる力が、この会にはあると思います。(GOTCHA)

会 則

- ① 本会の名称をベシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇一〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇一二五 上村第二ビル六〇三号 TEL七三二一三三七二) 内におく。